高井法博会計事務所　TACTグループ12社代表
高井　法博　挨拶

本日、『高井法博会計事務所創立30周年感謝のつどい』を開催しましたところ、創業以来大変お世話になっております関与先の皆様方、私を陰に陽に見守り育てていただきました人生の師・恩人の皆様方、その他多くの皆様方に全国津々浦々よりお集まりいただき、錦上花を添えていただきましたことは、私をはじめ社員一同誠に光栄に存ずるところであります。心から厚く御礼を申し上げます。

思いますれば、不器用で小心者の私が、学生時代には思いもしなかった税理士の資格をとり、昭和53年の3月、12年間にわたるサラリーマン生活にピリオドを打ち、税理士の資格だけを頼りに、税務署にも会計事務所にも勤務したことのない私が、妻とともに出生の地、岐阜市山県三輪の地に事務所を構えさせていただきました。その後、三輪の事務所の増築、岩崎への移転、そして現在の打越に再移転、また増築を行ってまいりました。

創業時に作った経営計画書の冒頭にお客様に対して行うサービスの基本方針を3つ書き込みました。

第一に中小企業の『ビジネスサポート業』になりたい。税務会計だけでなく、中小零細企業のあらゆる問題をサポートできる事務所になろう。第二に中小企業の『情報発信基地』になろう。情報が多ければ多いほど良い判断ができる。そのために、事務所が有益な情報を集め、発信をする。第三に中小企業の『社外重役』になる。法律上の役員とは別で、我々の気持ちはお客様の身内として、まさにお客様の経営責任を一緒に負う役員のつもりで仕事を行おうと、こう記入して仕事を開始しました。

そして創業時アメリカで見て、大感激をした25年分のカレンダーをさっそく作りました。25年と言いますと本当に長い年月があるとそう思いますが、月数に直してみますと、一年は12ヶ月ですので、25に12をかければたった300ヶ月。日数に直すと、29日も30日も31日もあるかもしれませんが、計算を簡単にするために30日をかけますと、300ヶ月×30日＝9000日ということになるわけであります。あっという間に人生が終わってしまう。25年というと何千ヶ月も何万日もあるように思うのですが、たった300ヶ月、9000日しかないのであり、これをご理解していただきたいと思うわけであります。まさに「一期一会」「一日一生」、この精神で生きねばならない、と強く思うわけであります。この25年分のカレンダーの中に、先ほどの3つのお客様サービスの基本とその施策を記入しました。事業計画を書き込んで、また人生設計も記入し、必死に頑張ってまいりました。結果、現在不完全ではありますが、12の会社団体「TACTグループ」が出来上がってまいりました。

本日皆様方にお持ち帰りいただく記念品の中に、今年を起点とする25年分のカレンダーをもう一度作って、入れさせていただいております。

30歳で資格をとり、31歳で会計事務所を開業し、今年で30年を迎えているわけであります。奇しくも、今年私と同級生であります妻は還暦を迎える年となりました。実は今日9月17日は私の60歳の誕生日であります。この日に『創立30年感謝のつどい』を開催させていただこうと、5年前にこの岐阜グランドホテル、この部屋、この「ロイヤルシアター」を密かに予約をしていたわけであります。まさにあっという間の30年、そして60歳であります。

顧みれば、人生はまさに一期一会、邂逅であります

終戦の翌年、昭和21年に、お寺の次男坊として生まれ、それまで大地主で大変裕福だったお寺が農地解放でほとんど全てをなくし、生活のために始めた事業も失敗し、学歴があるということで代用教員になった父が胸を悪くし、生活保護を受けざるを得ない状況となりました。その父が中学3年のとき、脳溢血で倒れ、高校進学も断念せざるを得なかったとき、母親や先生のお骨折りで終生の大恩人であり人生の師・株式会社後藤孵卵場創業者・後藤静一氏に出会いました。神様のおぼし召しで出逢わさせていただきました。奨学生寮を作っていただき、学費から生活費の一切の面倒を見ていただき、昼間の岐阜県立岐阜商業高等学校へ通わせていただくことができました。

この岐阜商業では、今の私の職業の基になっている簿記や商業科目を教えていただきました。人生の中のたった3年間ではあったわけですが、在学時はもとより、卒業後も数多くの先輩、同級生、後輩からいろいろなことを教えていただき、また助け、引き上げていただいております。

卒業後、大恩ある株式会社後藤孵卵場に入れていただきました。やる気だけはあるが、ドジで失敗ばかりする不完全な私を関連会社の総務・経理・企画室・社長室の責任者として次々と抜擢し、いろんな仕事を任せていただきました。

小さいときから貧乏ではあったが教育には人一倍熱心で、食べるものも食べないでいろいろな本や教材を買ってくれた父や母。その血を引いたのか、サラリーマン時代から本屋に通うのが習い性となりました。他の人より抜きん出るためには「他の人以上に勉強と努力がなければ勝てない」と思った。兎に角自分の稼ぎで本が買えるようになったのが嬉しかった。買った本をむさぼり読んだ。のめりこんだ。これを自分のものにしたら勝てる。体得しなくては損だ。重要なところにはアンダーラインを引いた。良いと思うところは赤、青、マーカーペンと色を変えて線を引いた。どんどん自分がポジティブになっていくのが実感できた。

職場でも会社の仕事というより自分の仕事と認識し、会社と一体となって働いた。仕事を通じて自分が成長しているのが実感できた。その間に専門学校にもどこにも通わず、参考書だけで独学で取得した税理士の資格だけを頼りに、お許しをいただき開業をした。

開業後もサラリーマン時代同様、睡眠時間を4、5時間にし、しゃにむに勉強し働いた。すばらしい友人、恩人、人生の師にどんどんと出会えた。

働きすぎて体調を崩す私をいつも救っていただく村上記念病院の井田先生、人生のまた経営の師であるTKC創業者の飯塚毅先生、ランチェスター経営の竹田陽一先生、販売戦略の酒井英之先生、幹部教育の染谷和巳先生、思想教育の第一人者竹内日祥上人、京セラ創業者の稲盛和夫名誉会長など、数多くの人生の師とお会いした。このような人の回りにはすばらしい人が集まっていた。いろいろ触発を受けた。何もない中で開業しただけにほしいものは後回しにした。あらゆるものを節約し、そのお金でいろいろな講演会に出て最前列で聞いた。良いと思うビデオやテープも買った。貴重なお金と時間をかけて勉強をした。私は能力がない。頭が悪い。だからいつも必死に勉強した。勉強していないと不安で不安で仕方がなかった。勉強すればするほど、成功するための知識が加速度的に増えた。難しいことはわからないが、それが正しいことであるならば、「人の倍やれば勝てる」ことを体験学的に身につけた。「努力は人を裏切らない」ことを確信できた。これらをもとに、それこそ駄馬に鞭打ち死に物狂いで頑張った。

実は、今回致知出版の藤尾社長の御厚意で、20年間にわたって書きつづけた機関誌「一期一会」の巻頭言に加除補筆をし出版させていただくことになり、実は今日この9月17日、に全国発売をさせていただきました。実は嬉しくて嬉しくて、自分の本を一冊本屋で買ってまいりました。「成功するまでやりつづける」副題として「中小企業の経営を伸ばす考え方」としていただきました。この本の「はじめに」と「あとがき」に大変長い文章を書きました。自分の気持ちを正直に書きました。時間の関係もありますので、そのうちのあとがきをご紹介し、私の挨拶の最後にさせていただこうと、そう思います。

おわりに

会社員時代、朝七時三十分から夜九時、十時まで働いた。その後夜中の二時近くまで勉強し、睡眠時間を四時間程度にして税理士の資格を取った。

しかし、真の勉強や苦労は開業後にあった。いくら苦しくても受験勉強は自分一人のために頑張ることであり自分の勝手であった。また、会社員として必死に働いたといっても、最終責任は会社の社長がとる。今は、責任の重みが何倍も違う。社長は逃げることができない。創業以来関与させていただいた同じ立場の社長と、真剣勝負で対峙してきた。一緒に悩み、考え、時には厳しくまた激しく、時には涙しながら経営についての意見を戦わせてきた。

企業の大小は関係なく、どの経営者も逆ピラミッドの底辺で一人で会社を支えねばならない。まさに会社の重みが両肩にズシリと伸しかかってくる。その重い荷を背負ったまま、前を向いて駆けねばならない。つまずけば会社もろとも倒れる。それは死を意味する。一難去ってまた一難、いつも能力を超える問題、試練が次々と私の前に立ちはだかった。そのたびに私は、悩み苦しみ、くじけそうになった。

しかし逃げてはいけないと、眼前の問題と向き合い、外敵との戦いにさらされていた。

こんな時、身内からの攻撃や思いもよらない裏切りにあうこともあった。前方と後方の敵にさらされた。会社が危機に遭遇するたび、私の周囲から少なくない人が去っていった。情けなくて、何て勝手なのだろうと思った。味方からの裏切りはキツかった。絶望的になった。同業者や、解ってくれていると思っていた一部の取引先や外野も、私を面白おかしく評論した。酒の肴にもされた。辛かった。

苦しかった。悔し涙が枕を濡らし、眠れない夜を幾晩も過ごした。鬱症状にもなった。四面楚歌の中で、もう死なねばならないなあと何度も思った。

しかし、そんな時、いろいろな先人や人生の師の生き方、考え方が脳裏に浮かび私を叱咤激励し、進むべき道を教えてくれる。まさに、人生や経験の真髄、肺腑をえぐるような言葉が私にビンビンと響いてくる。

企業家に必要なものは資質である。くそまじめに誠実に人生を考え、くそまじめに学び、一つ一つを大切にし、決しておろそかにせず、くそ真面目に実践して行く。

「志」を明確にする。「筋」を通す。「思想」を高める。「論理的科学的」に物事を組み立て「時間軸」で物事を詰める。いろいろあるが、そのうち最も重要なことは困難に負けずにやり遂げようとするスピリッツである。それは、私の母校岐阜商業高校の校訓「不撓不屈」の精神である。困難にブチ当たるたびにこれを思い出す。私は胸ポケットに、いつも滝口長太郎さんの詩を入れています。汗で薄汚れて、ラミネートで包んだそのラミネートは、補修して割れそうになっています。そこに詩が書いてあります。こんな詩です。

「打つ手の無限」

すばらしい名画よりも
とてもすてきな宝石よりも
もっともっと大切なものを
私は持っている。
どんな時でも
どんな苦しい場合でも
愚痴を言わない
参ったと泣きごとを言わない
何か方法はないだろうか
何か方法はあるはずだ
周囲を見回してみよう
いろんな角度から眺めてみよう
人の知恵も借りてみよう
必ず何とかなるものである。―なぜなら
打つ手は常に無限であるからだ

苦しいとき、つらい時に、これを取り出して読む。そして気を取り直し、前に進む。粘りに粘り、決してあきらめなかった。どづかれ、けなされ、踏みつけられ、裏切られても、中傷されても前へ進んだ。必死に、死に物狂いで対峙した。そうするとその都度、誠に絶妙なタイミングで神風が吹いた。後ろを振り向いてみると、いつ足を踏み外してもおかしくないほどの断崖絶壁の細い一本道を歩いているような、そんな気がいたします。こんな時、武藤をはじめ私を守り心を一つにして背中と背中を合わせ、一心同体となって日夜必死に仕事をこなし、困難な問題や四方の敵と戦ってくれる社員がいた。うれしかった。心強かった、心から感謝したい。残った社員が良い社員だと思った。残ってくれた社員に、「本当に喜んでもらえる職場を作らねば」と、心から思う。

こんなドジな私を信頼し、助けてくださったお客様や顧問、相談役、友人、銀行や役所の方々、女房、仕事仕事で父親らしいことは何もしてやれないうちに成人してしまった子どもたちに改めて感謝したい。

いろいろあったが、考えてみれば私は、この世で実にまれな恵まれた男であると思う。まさに「おかげさま人生」であると思う。

高僧、松村泰道師より教えていただいた、をさはるみさんの詩を最後に掲載し、筆をおきたいと思う

私が私になるために
人生の失敗も必要でした
むだな苦心や
骨折りも
悲しみも
全て必要でした
私が私になれたいま
みんなあなたのおかげです
恩人たちに手を合わせ
ありがとうございます
と、ひとりごと

嬉しいことも一杯でございました。どれだけ話しても意は尽くせませんが、時間の関係もありますので、このへんで終えさせていただきます。今後も生ある限り、皆様の経営のお役に立てる自分であるよう、またお付き合いいただけるように、精一杯精進、努力してまいります。本当に30年間ありがとうございました。心から、心から、みなさんのご支援に感謝を申し上げつつ、あわせて今後とも変わらぬご教導を賜りますことをお願いし、私の挨拶に代えさせていただきます。本当にありがとうございました。